

本年初頭に現出したスターリン主義の腐敗の現実—ベトナムのカンボジア侵略と中国のベトナム侵略—をめぐって、国際スターリン主義戦線のあらたな分解が進行している。同時にそれに規定されて、日本の既成左翼や左翼知識人たちはさまざまに対応の仕方をしめしている。しかしそれらは、せいぜいヒューマニズムのなまなまを吐露する部分以外には、総じて非生産的なおしやべりにすぎない。多くの中国問題の特集が雑多なかたちで組まれたりもしている。「世界」三月号の中国特集もその一つであった。

なんの怒りも痛みもなく

中嶋の発言の特徴

「整理してみせよう。すなわち、①社会主義のあり方、②社会主義の国際関係の問題、③国際政治、国際関係の問題、と。そして④については次のように言う。「インドシナ諸国は、中国の社会主義の教訓を学ぶ余裕がなかった」反面、「中国の内政とある点での国際関係をもっている」という問題が、社会主義のあり方について「土壌を提供している」と。

「座談会」における中嶋の発言の特徴を整理してみよう。その第一の特徴は、ベトナムのカンボジア侵略という現実への態度が、まったく客観主義そのものなのだ。なんの怒りも、痛みも持っていないかのようである。中嶋は「社会主義の論理が四分五裂し、連帯の論理どころか民族対立、国家エゴイズムがむき出しのかたちで先行した」として、問題を「二つに分

にも似た気持をいだかされた。各発言者がかつてな床屋政談をしていこうというばかりではない。ベトナム—カンボジア戦争、中国—ベトナム戦争で、各国スターリン主義官僚によっていったいどれだけの兵士が、労働者・農民が、殺されたのか、こうした事態をうけとめる感性が、この人達にはまったく感じられないのだ。菊地昌典や田所竹彦、中兼和津次、中嶋嶺雄らが、斉藤孝の司会で話を進める形式をとっているが、私は、中嶋嶺雄の発言に沿って、感想と私の考えるべき課題についてまとめようと思う。

ナムのカンボジア侵略への客観主義的で間違った評論にあらべて、中国をよめるかという問題で、ポジティブな姿勢になるといふ点だと思ふ。中国のベトナム侵略

インドシナ情勢の評論に1979.07.23

「露呈した構改派の地金」 「解放」

インドシナ情勢の評論に 露呈した構改派の地金

「世界」三月号座談会—中嶋嶺雄の場合

小林 正

文筆を否定するのみならず、それを「コミューン論理（運動）」とやらえつつ、家長体制維持のためのもの、ないし中国社会に妥当しないものというように否定しているのである。

◇ 今日の中国の見方について
は、「菊地が「異質だ」と発言したことにたいして」「毛沢東路線からの完全な離脱、訣別である」とする。そして毛沢東家長体制からの解放、是正された現実と想定する。しかし、そのリターナチが転換をして、「じゃにむに日本なりアメリカなり、そちらの方向に急激に接近する形で」「四つ

路に飛びついた日共と類似して。要するに、④中国の社会主義の欠陥として、毛沢東路線、「毛沢東毛沢東」が中国に社会主義として「妥当」であったか（妥当でなかったか）。「それを表現する方法が妥当」であったか（妥当でなかったか）。「毛沢東型の家長体制という権力集中」に大きな矛盾と

現代中国論（青木書店、六四年）を通過してみた。相当な「中国研究家」である。それも構造改革・トリアッティ主義に近い人なのだろうということがわかって、なるほどな、と思った。

問題の第一は、ベトナムのカンボジア侵略や中国のベトナム侵略のうけとめ方である。「ある者は激怒をこめて、又ある者は恥じらいと断腸の念をかみしめながら目撃すべき」である、ハンガリー事件について六四年ごろに書いた「社会主義研究者」中嶋の影も見えないといわなければならない。しかしそういうことかかなりの美化になるであろう。過去の「一見真摯な態度そのものが、エセな代物であったのだから」。やはりなぜそうなるのだから。やはりその問題意識、場所的実践的立

中国の対内政策と対外政策の「矛盾」とは？

をもちいている。では次に、若干の問題点について考えてみたい。

私は、中嶋嶺雄という人の過去の戦略のつらさ、現在に去るにつれての知識はほぼゼロに等しい。現下を展開している。このよう

第四の問題として、ソ連クレムリン官僚やベトナムハノイ官僚の意向と、その物的基礎の分析についてである。彼は一方でカンボジアは「コミューン」国家をめざし「ア」といふは聞かぬはよいが、人民寺院事件と共通する一問題を内包している、などと罵倒している。だが、他方ではベトナムの現実、つまり生産力主義にもとづく国内建設の破綻の事象や、その隠れい排外主義的のりきりのため、クレムリンのうしろたえを得てカンボジアを侵略したハノイ官僚についてはなんら語られてはいない。これは、子において菊地のいう「ナ地域」の問題として、「中国革命以降の中国の社会主義の教訓を学ぶ余裕がなかった」ことと書いているのみである。ここで彼が「教訓」——「過渡期を漸進的な社会主義への移行過程として」という発想と年代、おそろしく、中国革命後五〇年代なれば、ほかならないトリアッティであった。彼・中嶋はイタリア共産党のこのようななれの果てを、ど

さらに第三の問題は、平坂的・直接的な「連帯反応」という規定である。日中条約、越条約……と。こう単純には現実はない。中国の対外的パターンが「中国の対外的パターン」があったからソ連が活性化されたというわけのものではない。米帝・カーターは、その世界支配を日帝に速めさせたり、ベトナムを日帝に速めさせたり、ベトナムのソ連加盟やソ越条約の締結にたいして米中国交回復の早期実現などを展開している。このよう

第五の問題は、文革の否定と「文革」否定の右翼性

第五の問題は、文革の否定と「文革」否定の右翼性

第五の問題は、文革の否定と「文革」否定の右翼性

見てもいい

七面につづく